



和歌の訳

週末に日比谷の入学者選抜（学力）が行われるが、3月1日（木）から後期期末考査が始まることを考えると、君たちにとっても重要な時期といえる。採点日も含めると、金曜日から火曜日までが家庭学習期間となるので、その時間をうまく活用して準備してほしい。特に、今までの考査で副教材（例えば、国語では現代文の「実戦長文読解問題集」とか、古典の「プログレス発展問題集」とか…）の準備が十分にできていなかったと感じている人、あるいは、付け焼き刃で答えだけ暗記して考査に臨んでいたというような人は、ぜひ今回こそじっくり取り組んで、この考査の勉強が、そのまま受験勉強の一端となるような取り組みをしてほしいものである。

*

ところで、考査前なのでまじめな話題。

今回の古文の範囲に「深草の里」があり、簡単なが和歌に関する学習をしたわけだが、ご存じのように、センター試験には和歌が極めて多く出題されているし、二次試験でいうと、多くの諸君が受験する京都大・千葉大で、「和歌を訳せ」という問題がほぼ毎年出題されている。また、東大でも、和歌が分かっていないと（ダジャレ…笑）解けない問題や、全部ではないが、その一部を訳させる問題などが数多く出題されている。その意味では、「和歌は分らん！」（ダジャレ）などとは言ってもらえないのである。

例えば、今年の京都大では、

「今さらになに生ひ出づらん竹の子の
うきふししげき世とは知らずや」

を訳せという問題、千葉大（2014年）は、
「何さまで思ひ出でけむなほざりの

木の葉にかけし時雨ばかりを」

を訳せという問題がでていた。どちらも3年生が添削してほしいと持ってきて、今手元にある問題から引き写したものである。（前後の文脈がないので、これだけだと難しい）

また、先日の「プロシード模試」では、
「あはれとて問はるることもいつまでと
思へば悲し庭の蓬生」

を訳せという問題が出題されていたが、「深草の里」に出てくる和歌と構造がそっくりである。プロシードが難関大学をターゲットにした模試であることを考えると、和歌に慣れしておくことが大切だということがよく分かるだろう。しっかり復習を。

ちなみに、問題になっている和歌にはどれも「句切れ」があることが分かる（京大＝二句切れ、千葉大＝二句切れ、模試＝四句切れ）。

訳すには、授業でやったように、

①テーマ（雰囲気）を大づかみしておく。

①句切れを見つける。（訳す時には、必ず「。」をつける）

②句切れたら、その句切れたパーツ相互の関係を考える。

③掛詞（などの技法）に注意する。

という手順を踏んで訳をつくることになる。なお、古文の訳は基本直訳だが、和歌に関しては意識でよい。だから、何についての歌かを捉えることができれば、後はあまり恐れることなく大胆に訳をしても構わない。

3年生の理系自選でも、文系必選でも和歌を扱うことになる。いくつかの和歌の訳を覚えることで、それを応用しながら、「それらしく」訳せる練習をつもう。